

騒動が発生し、その翌年には神戸の造船所や陸軍の砲兵工廠にストライキが起こった。

暉峻所長の青春の時代は日本が揺れ動いた時代であった。このなかで暉峻所長のころも揺れ動いたのであろう。そのうえに医学を学んだということは、これをさらにアクセルしたに違いない。というのは暉峻所長は医学の中では生理学にもっとも興味を持ったように、労働者の労働条件の問題も生理学によって解決しようと考えておられたらしいが、生理学の思想には、全身の細胞が一つの生命の目的に強く協力するという、将来、全体主義思想に発展する思想の芽がある。このために昭和反動期には生理学の橋田教授が戦争協力の責任を感じて服毒するというようになるのだが、暉峻所長は医学としては生理学に心酔している反面、現実の問題として衛生学(当時の衛生学の主流は細菌学であった)それも社会衛生学の実践的な面に飛び込んだということであった。この二つの相反する葛藤に悩みながら世の動きに流されたというのが、暉峻所長の現実ではないかと私は思っているのであるが、この本はこのような私の考えに一層自信を持たせて頂けたことを感謝するわけであった。これが私の至らない読後感であった。この時代はいろいろな風格の人が輩出した、暉峻所長はその最たる人であらう。

(高木 和男)

〔リブポート社発行、一九九一年、B六判、三〇三頁、
定価一五四五円〕

富士川英郎著『富士川游』

待望久しかった『富士川游』が今回公やけになり、欣喜雀躍し、また安堵の胸をなでおろした者の一人として、この感想文を書きました。

昭和二十九年出版の『富士川游先生』の第一部を執筆された富士川英郎氏が戦後の混乱期の中で、游先生の弟子とも言うべき故三枝博音氏とともに編取されたのには、それ相応の内部事情が察せられるのですが、時代が時代だけに何かと制約があり、後日完結を期せられているやに聞いているところがありました。

その間、手元の多数の資料を整理され、また発掘された新しい資料につき検討を加えられた上で、第一部の原作に肉づけされ、今日の人に読み易く、認識を深め易くされるため、その後三十年の歳月をかけて心労を重ねられた事を想像するとき、凡庸のよくするところでなく、感心する外ありません。

游先生が医学の分野に於て刻まれた足跡が丹念な史実によって裏打され、何等の粉飾なく記述されている本書は後世に残る良書と評しても過言ではありません。

游先生を探究せんとする後進の医師にとつて、必読の入門書として紙価を高めるのではないだろうかと思ひます。

翻つて昭和五十年、地元から游先生顕彰の声が澎湃として起り、日本医学学会の協賛を得て、顕彰会が大々的に発足した当初、偉大な先生の顕彰が地元主導の形で遂行する事は是非、事業の成功

の見透しなど、危惧の念も相当ありました。しかし顕彰碑を建立する点では異議はないので、これを第一期事業となし、生誕地と広島大学医学部校内の二カ所に碑を建立するのに成功しました。

引きつづき、第二期事業として先生の数多い著書のうちから、要望に応じて複製を始めようと公約したのですが、現実には意の如く運ばず、立往生の已むなきにいたりました。

幸い富士川英郎氏の計により『富士川游著作集』『医談』が相次いで発刊され、このたび『富士川游』の出版に及び、我々の企画を埋めていただきました。

顕彰会の面目を立てていただいた点で、我々の喜びは格別のものであります。

ただ、故三枝氏が『富士川游先生』の中で分担された游先生の精神面、信条、宗教分野、人間性についての概説は今日なほ貴重な価値を失ってはいないので、広大なこの分野をこのたびの『富士川游』の如く、詳細に亘って教示されていただければと願うのですが、今更叶えられず、悔いは千載に残ります。

宗教分野の著書はぼちぼち店頭に出ていますので、我々顕彰会の肩の荷も幾分軽くなっています。

改めて富士川英郎先生の営為に対して感謝の意を表します。

(中川 和夫)

〔小沢書店、一九九〇年、A5判、三五九頁、

定価四、六三五円〕

岩波泰明著『御目医師 竹内新八』

本書の内容は大体三部から成っている。

第一部は、江戸時代医学史上日本の四大眼科の一つとして有名であった諏訪竹内流眼科として知られた竹内家（代々竹内新八と称した）の由来記と、従来その内容のよく判らなかつた眼科診療の内容を解明したものである。

第二部は、竹内流眼科を実施した人たちの伝記を主材として著者の文芸創作『秘伝』（諏訪のめいしあり）で、第三部は、家伝の医書『玉泉房流秘書』（全）の複製を取載する。

第一部を主材として、眼科学史の立場からその内容を紹介する。著書は竹内流眼科について次のように述べている。

「伊豆下田から奥三河振草郷に移り済んだ伊東氏一族が、その地に下田村を建設し、その一族の一人が竹内と姓を改め医業を始め、しかもその医業は啓迪院医学校で正式に修得した医学にもとづくものであったということである。その後或は甲斐の徳本の医術も学んだかもしれないし、鳳来寺の眼科医学も取り入れたであろう。急速に進んだ日本の医学を、巧みに取捨選択して素晴らしい竹内流医学を組み立てたのであるが、爾来、竹内流医学は曲直瀬道三の「慈仁」と竹内家の血の中に脈々と流れる「研究心」によって、日本の眼科医の水準に到達していったと見たいのである。」

従来、諏訪竹内流眼科では、各代とも竹内新八を称した結果、その著作や事蹟が何れの新八に属するものか不明なものが少くな